審議会等の会議結果報告

１．会　　議　　名	第 24 回　松阪市政推進会議
２．開 催 日 時	令和 4 年 3 月 29 日（火）午後 3 時 00 分～午後 5 時 00 分
３．開 催 場 所	松阪市役所　議会棟　第 3・4 委員会室
４．出 席 者 氏 名	出席委員：梅村光久委員、岡山慶子委員、髙島信彦委員、西川明樹委員、西村訓弘委員、三井高輝委員、村林守委員、米山哲司委員、渡邊幸香委員 欠席委員：門暉代司委員、酒井由美委員、辻岡宜子委員、平岡直人委員、松浦信男委員 事 務 局：竹上市長、山路副市長、永作副市長、岡本企画振興部長、藤木企画振興部経営企画担当参事兼課長、小川企画振興部経営企画課政策経営係長
５．公開及び非公開	公開
６．傍 聴 者 数	1 人（内、報道関係 1 社）
７．担　　当	松阪市企画振興部　経営企画課 TEL　0598－53－4319 FAX　0598－22－1377 e-mail　kei.div@city.matsusaka.mie.jp

・議事録は別紙のとおり

第２４回 松阪市政推進会議　議事録

１．日　時　　令和４年３月29日（火）　午後３時00分～午後５時00分
２．場　所　　松阪市役所　議会棟　第３・４委員会室
３．出席者　　梅村光久委員、岡山慶子委員、髙島信彦委員、西川明樹委員、西村訓弘委員、三井高輝委員、村林守委員、米山哲司委員、渡邊幸香委員
※欠席者　　門暉代司委員、酒井由美委員、辻岡宜子委員、平岡直人委員、松浦信男委員

〔事務局〕竹上市長、山路副市長、永作副市長、岡本企画振興部長、藤木企画振興部経営企画担当参事兼課長、小川企画振興部経営企画課政策経営係長

１　市長あいさつ

あらためましてみなさんこんにちは。年度末の本当にお忙しい時期にこうしてお集まりいただき、まことにありがとうございます。令和４年度に松阪市が行う新規事業を中心に話をさせていただいて、こういう方向で考えたらどうかというご意見をいただきたい。というのもこの予算を出したのが２月初めで、あれから１か月半経ったがウクライナの情勢などは正直読むことができない。世界秩序が再構築されるなどの話はこの時点ではなかった。１か月半というでもこれだけ変わるのだから、令和４年も１年経てばまた世の中はずいぶん変わるのだろうと思う。その中でも市民サービスの提供や暮らしやすいまちを作るには少し先取りをしながら、次なる一手を考えていくことが必要と思っている。そんな意味合いから本日は皆さまからいろんな意見をいただきたいので、よろしくお願いします。

※松阪市政推進会議規則第５条により、会長が会議の進行を行う。

○　会議の公開・非公開の決定

会長）

みなさんあらためましてこんにちは。お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。委員任期最後の会議となる。令和４年度の主な事業についてという資料を見て、すばらしい松阪らしい事業と思った。その中で委員の皆さんのご意見がさまざまな場面で反映しているのだと思う。松阪はいろんな人の意見を容れる度量があり、それに我々もなにがしかの役に立っていると思う。本日もどうぞよろしくお願いします。

今回も公開ということでよろしいですか。

（異議なし）

会長）
　ありがとうございます。では本日も公開で進めてまいります。

２　協議事項
　１）令和４年度の主な事業について

会長）
　では協議事項に入ります。「令和４年度の主な事業について」、市長からご説明をお願いします。

　　（市長より資料に基づき社会的つながり創出提案募集の経過と結果の説明）
　資料　令和４年度予算の基本的な考え方
　資料　令和４年度の主な事業について

会長）
　ありがとうございます。それでは何かありますか。

委員）
　三井高利の 400 年について具体的に分かっている内容を知りたい。

市長）
　まず三井家発祥の地の開放が今年の大きな目標。常時ではないが夏くらいをめどに開放したい。例えば毎日曜など。それからゆかりのある土地として松阪、日本橋、京都の３都市でシンポジウムや講演会のようなものをやりたいと考えている。あと、今歴史民俗資料館で三井家の企画展をしている。文化観光両面から PR をしていければと思っている。

委員）
　ありがとうございます。１つ提案として、自分も蒲生氏郷公顕彰会の活動をしており、松阪全体の偉人顕彰団体協議会というのもしている。そうした中で三井家も大いに関わりがある。もう一つ三井家は地元ということもあり、市民団体がかなり三井家に関して活動して見える。そういうところと行政とのコラボレーションをして欲しい。行政のやっていることは、市外や県外に発信することも大事だが、地元に浸透していないように感じる。地元の熱意のある方や団体とのコレボレーションをすれば、もっと効率よく良いものができるのではないかという提案です。

市長）
　それは大歓迎。あまり三井高利生誕 400 年が令和 4 年であることは市民に知られていない。そういう市民グループを巻き込みながら市民の皆さんに周知するのは非常に重要なこと。喜んで一緒に

させていただきたい。

委員）
　例えばもっと三井家を知っていただくなら、検定試験などしてもらう方法もある。蒲生氏郷や本居宣長、三井高利など。もう１点、これはPRになるが、氏郷公顕彰会で本町に関係する偉人３人について、本町もシャッター街となっており寂しくなっているが、来訪者におもてなしの心を伝えるため、シャッターに1.4m×1mのマグネットを貼って松阪の偉人を顕彰し歴史を知っていただこうという取り組みをしている。４月に記念式典をする。そういった中で地元の盛り上がりや熱、松阪愛を育むという点で地元を巻き込むというのも必要と思う。行政だけで事業をしていただくのも良いが、やはり目に見えない部分がかなりある。地元も盛り上げる必要があると思う。

市長）
　ぜひ喜んで一緒にさせてください。

委員）
　ご意見に反応するわけではないが、お金がかからないという点。もちろんその視点も良いと思うが、お金に代わるような得るものがあるからこそ市民活動が続いている。お金に代わるものの何かを提供して差し上げていただきたいなと思う。すなわち達成感、幸福感、満足度など、数で計れないとても大切なものがここにある。それが今回の大きな変革、価値観の変化と市長がおっしゃったところと同じではないかと思っている。例えば駅の横断幕が非常にすばらしいと思っている。障がいを持った方がスポーツ大会で賞をいただいて横断幕に名前を掲げていただいた。横断幕の前で写真を撮るということで非常に心が通うものがあり良い体験をさせていただいたと感謝している。そのような、住んで良かったとか、承認される感じというものを、市民活動団体と連動いただくなどでさらに進めていただくとシビックプライドに繋がるのではないか。ぜひお願いしたい。

委員）
　三井高利さんは今の混迷した社会の中で、とても大事なことをメッセージした人だと思う。まちをつくるということももちろん、ビジネスのありよう、雇用など、今一番必要だと思われているような社会の中でのありようを暮らしの中で実現してきた人だと思う。そういう意味でもう少し大きい意味でとらえて、今日の資料に事業が載っているが、例えば三井高利というキーワードで切ってみると、たぶんまた全然違う企画が出てくるのではないかと思って見ていた。そんなに記念すべき年が毎年あるわけでは無いので、この時期に松阪がそこをキーワードにしながら、いっぱい出てくる企画をそういう視点から見直してみると、ある種のまとまった”松阪のあるべき姿”みたいなものがすごく見えてきて、それが今の社会にとても大事なことを言っている気がする。それができれば、企画もばらばらに見えないのではないか。

委員）
　次の世代の子どもたちに“こういうまちに自分たちは住んでいるんだ”というプライドをどのように醸成する方法があるのか考えていた。コロナのこともあり、ほぼ全ての生徒が個人のタブレットを持っている。そういうものを通して、講演会場やシンポジウムの会場に行かなくても、例えば小学生のお子さんでもわかるような情報発信をすることも以前より容易にできる環境が整っているということは何か強みにできるのではないか。よく“こういうシンポジウムがあるので各教室に貼ってください”といった依頼があるが、なかなか効果がありそうでない。子どもたちは結構残酷で興味のあるものは自分から情報を取りに行くが、教室に貼ってあってもそれが何者かがわからなければスルーされてしまう。ちょっとしたきっかけで、なかなか授業として使うのは難しいが、せめて興味のある子がアクセスできるような方法を模索いただくとありがたい。もう一つは高校生なんですが、新学習指導要領がこの４月からスタートする。総合的な探求の時間というのが順送りで進んでいく。来年は高校１年生、再来年は高校２年生までというように。これは基本的には生徒自身がテーマを決めて様々な社会的問題などを掘り下げていくというもの。おそらくこの地域の高校生であれば地元をもっと深く知るということを探求していく生徒さんが必ずいると思うので、そういう子たちの材料としてもこのシンポジウム、三井高利生誕 400 年が終わった後も活用できる、何かレガシーを残していただくと次の世代の子たちに何らか残るのではないかと思う。

委員）
　今のお話しで、長期的な視点は重要と思う。400 年祭だからといって盛り上がったとしても、今年で終わってしまっては何も根付かない。各事業も地方間の競争であり、他の市町村もいろんな事業を行い、発信をしてくると思う。ただ発信をしても届かなければ意味がない。“興味がある子どもたちは自分で情報を取りに来る”とおっしゃっていたが、興味のある人は放っておいても必ず乗ってきてくれる。興味がない人にどうやって認知させるか、周知ではなくより深い認知をどうさせるかが大事。半ば強制的な放っておいても目に留まるようなものが必要だと思う。企業のマーケティングも同じで、発信をしていても情報を取りに行ってもらわなければ意味がない。見にいかなくても見えるというツール。それは企業も探しているし、地方公共団体も同じ。勝ち負けではないがそのヒントをつかんだところが勝つのではないか。あと、冒頭にコロナやウクライナの話があったが、この２年間、またはこの１、２か月の間で個人の力の及ばないことが多すぎたと思う。人間としても一人の事業者としても自分たちの力が届かないし、変えることもできないというなかで、全ての人が不安を感じている。やはり前を向いて歩ける後押しを、良く民と公の住み分けというが、その住み分けを少し変えて行かないと支援が追い付かないのではないか。

委員）
　地方創生とカーボンニュートラルと教育の３本柱は個人的に非常にすばらしいと思った。地方創生は良いなと思う一方で、私のまわりでは“松阪出身”というコネクションは実はあまりない。知らないことが多い。ここの地理の良さは何かと言うと伊勢神宮に行く道すがらであるというところ。

伊勢神宮に行く人は絶え間なく数が居て、そのうえに立ち寄れる興味あるスポットとしての育成ができると面白いのではないかと思っている。その時に三井高利、本居宣長、蒲生氏郷、結構良いコンテンツがある。今回三井高利生誕 400 年もそうだが。もう一つ考えたのが２年がかりで考えても良いのではということ。来年は三井高利が越後屋を創業して 350 年になる。これは三井グループの創業 350 周年でもある。その連携も図ったうえで、来年は松阪市が行うというよりは、いろんなところでマスコミも含めて取り上げてもらえる可能性ある。その前哨戦としてどう使うかということを考えながらされてはどうか。あとは松阪と言えば皆さん必ず“お肉”と言うので徹底的にお肉とくっつけてはどうか。２年がかりで松阪に寄ってみたいなと思わせるような発信をしたらどうでしょうか。またカーボンニュートラルも大事と思っている。というのはウクライナのこともありエネルギー価格が間違いなく高騰するし円安が進むなかでインフレが将来的には発生すると思うと、いまカーボンニュートラルを積極的に考えなくてはいけないと思う。

委員）
　ＳＤＧｓと三井さんは近いものがあると感じる。

委員）
　あまり知られていないが、江戸時代から従業員を大事にしてきたということがある。

委員）
　三井家とからめた事業は大事と思う。一方で市長の「未来の姿」というものが少し見えてきたようにも思うが、もっと前面に出しても良いのではないか。子どもたちの不登校などみんなそれに絡んでいる。小学生だとしたら 20 年後や 10 年後でも将来の社会が読めない可能性がある。将来のビジョンをしっかりしてあげるところからバックキャスティングで今何をやるべきかを決めていくやり方がある。今はこういうやり方が多い。逆にこうしないとほとんどの人々が道しるべがなくて不安になっている。つまり市長のビジョンを示していただくとそれを目ざしていける。資料の中で、エンディングサポートはすごく良いと思う。今は安心して死ねない時代。安心して死ねるまちを作ってほしいと思っていた。市が看取るまではいかなくとも人生の最後をしっかりサポートしていただくと、それまでの間は一所懸命生きられるなと思う。松阪にいたらそれが実現できるとなったら良い。飯南高校で留学をやろうかというのも資料にあるがこれも重要。特に山村部の医療と教育などは今後不採算になっていくため、どう維持するかが非常に大変。維持しないとそこに人が住めないとなると高校の維持は重要。高校がなくなると子どもたちが居なくなって人が住まなくなる。沖ノ島が一番有名だが、島根県は島根留学など、都市部から１～３年留学するなどかなり積極的にやっている。そのような形で松阪に特に高校生たちを来させれば、今いる子たち以外の子たちでその学校を維持できる。そのような仕組みを積極的に作るのが、人口が減っていってもその地域に教育を維持するためには重要。同じことは医療でもある。今の住民が減っていくなかで、採算をとるために関係人口の人たちにそれを使ってもらう。ここに長期滞在して働ける人たちがここで医療も受

けるようにしていけば、住民の人以外が医療を受けるので病院の採算性がとれる。皆がチャレンジ出来てのびのびと生きることができて、最後はここで死ぬことができる。昔アリゾナ州のサンシティと言うところに行った。ここは遺伝子工学が進んでいてアルツハイマーの研究について市を挙げてやっている。高齢者に移住してもらい、最後に脳を検体する条件で 60 歳以上の人たちは医療費無料。そこで老後を過ごす。合理的。このやり方が良いかどうかは別にしても、例えばエンディングサポートをやるなら、亡くなった方々が何か、資産とか含めて松阪市にご提供いただくということも有りだと思う。でもその代わりしっかり松阪市はインフラも守り、最後は亡くなるまでみますよということ。もしかすると他の地域より先んじて未来型の都市の一つの基幹になる考え方になるのではないか。ミシマサイコの事業は確かに資金を得ることができる、ある企業が全国的にそういった事業をしており、人が住めないような山間地に資金を得る仕組みをつくっている。そういうまちづくりを総合的に考え、未来図を描いてバックキャスティングで「そういう意味で未来に向かってのチャレンジ予算を作っていますよ」と書かれているとすごく良いと思う。

市長）

　総合計画を作った時の一番の目標が、「ここに住んで良かった…みんな大好き松阪市」。なぜこれを私が大好きかと言うと、「ここに住んで良かった」というのは達成感や承認感、一つ象徴的なのは親の死に方と思う。親が死んだ時にきちんとできているまちは住んでいて良かったなと誰しもが絶対思うまち。そういうまちづくりをきちんとできるかどうか。それと昨年あたりから少し政策の方向を変えている。どういうところを変えているかというと「ここに住んで良かった」感が実感できるようなまちづくりに少しずつシフトしている。この４月から徳和地区でコミュニティセンター化を始める。そこは市民センターがあり行政職員がそこに居た。それを、行政事務はやめるが、その代わりコミュニティセンターとして地域の人に建物の管理など全てお任せする。地域の困りごとも地域の人にやってもらう。では行政は何をするか、それが福祉。先ほど重層的支援の話をしたが、これからは超高齢社会、人口減少。つまり行政コストをかけずに福祉の実現をある程度しなければならない。行政は福祉に一歩踏み出さなければならない。今までやっていた仕事を少し福祉にシフトしていく。それがある面では暮らしやすさ。死亡事務もその一環。独居の方が増えていくとどうするのか、民生委員さんは今本当に大変。そんななかでこういう制度があるとすごく助かる。そういうことをひとつひとつやっていくことで、より暮らしやすい方向に投資していく。今までは雇用などに投資していたのが、昨年あたりから少し福祉にシフトしている。目に見えて大きく変えているわけではないが、これからの世の中を考えると、そこに今のうちからある程度準備をしておく必要がある。これから福祉部門の事務量はどうしても増え、行政職員の人材育成も非常に大事。方向的に住みよいまちをつくっていくことでひとが集まるまちにしていく。中山間地域についてもそう。松阪も広大な市域、合併自治体ですので過疎地域もある。例えばその中で飯南高校は絶対残そうといろんな取り組みをしている。ありがたいことに学校が大変頑張ってくれて今年も定数８０人のなかで７９人の入学生。なんとか持ちこたえている。それは地域の力も学校が頑張っているということもある。少しだが市の後押しもある。そういったまちづくり。どこに住んでいても住んでいてよ

かったと思ってもらえるようなまちづくりをするという目標を持っている。

委員）
　以前、「ここで死ねてよかったというまちにしたい」という発言した時にすごく賛同してもらった。終わりから始まるQOLというか、より良く死ぬということをQODと言いますが、そこが良くなるにはその前段が良いということに通じる。ここに生まれて良かった、ここで死ねて良いなということが実現すると良いと思っていた。

委員）
　三井家の方々も従業員の方々のお墓まで面倒をみたということは、安心して死ぬことができたということ。経済成長期と成熟期があるが、成熟期はだめではなく一人一人が大事にされて皆がチャレンジできる時期。経済成長期は皆で一つの目標に向かって集団で行くとき。成熟期の一人一人の力を発揮させるためには安心させなければならない。そこで一番重要なのが安心して死ねるということ。そういうまちを作っていたのが松阪であり、この辺の地域だとしたら、それを前面に打ち出すのならば説得力が大いにある。そういう絵を未来図として描いていただくと玄人には非常に受けると思う。

委員）
　今市長から言っていただきましたが、４月以降コミュニティセンター化を頑張ってやっていこうかと思っている。こんな小さいことだと市には言えないけど地元の人には話せるということも沢山ある。いろんな場つなぎができたらと思っている。徳和のなかで川柳をやっていて募集をしたところ２００近く集まったが、１つのクラスの子が「みんなで考えた句です」と持ってきてくれたのが、「ぼくたちはずっとすみたいこのまちに」というもので、感動した。「館長の電話１本ですぐ参上」というのもあり、地域性を表しているなと思った。エンディングサポートでもエンディングノートの説明時に人が多く集まった。地域の力が松阪市を支えていく力になるのかなと思っている。こういった良い事業が求めている人のところに届かないのはなんでかな、ということをものすごく感じる。困っている人に届ける橋渡しがもし私たちでできるのであればと思う。地域では本当に小さい困りごとがたくさんある。またこんなことしたいということもたくさんある。行政も助けていただきたい。残念ながら行政も地域も人によるところもあるが。本当に思いをくみ取って欲しい。

会長）
　三井高利のイベントの年というだけでなく、三井高利の生き方が松阪の生き方を表している。そこから松阪の未来を描くことはとても良いこと。それをどうやってするかということだが、行政だけでは難しいが、市民を巻き込むというお話があった。三井高利を通して松阪はどんなまちかを市民が学ぶような場を作りながら、その先に松阪のあり方はどうあるべきかというのも市民に考えて

もらうというのも良いのではないか。そしてそれを来年も全国的に湧くとしたら、さらに来年の事業にもつないでいくということができるのではないか。

委員）
　成人年齢が 18 歳に変わるがどういう影響があるか。

委員）
　例えば高校生でも民法改正ですでに 18 歳に選挙権が付与されている。選挙が実施される際に投票権のある子、ない子が同じ教室にいることになる。教室内の会話で公職選挙法に触れる場合もある。そもそも学校では政治的発言を控えるという暗黙の了解がある。今のご質問は、18 歳になった生徒をどう悪意から守るか。参議院でも議論があったが具体的な策は答弁されていない。また生徒がクレジットカードなど様々な債権が保護者の了解なく契約できてしまう。銀行協会も大手は 18 歳にそれを適用しないとしているが、具体的な動きをスピーディに高校の教員と特に生徒に発信している。相当気を付けないとトラブルの可能性ある。行政や学校などすべてが取り組まないと解決できない。

市長）
　これは消費者保護の話。全国の都市で消費者センターがあり相談窓口を作っているが、それで解決するかというとなかなか難しい。すぐ解決するものではないが、18 歳で成人となるので、おそらくこれから学校教育のなかで金融教育をやらざるを得ないのではないか。

委員）
　違う話になるが、「住んで良かった」というまちづくりはおっしゃる通りと思う。他の委員も言われたが選ばれるまちでなくてはいけない。今、働き方で大きく変わってきたのは在宅勤務が普通になってきているということ。理由は明確で在宅勤務を可としないと社員が入って来ない。ないしは会社をやめてしまう。働く方々が働く場所を選べるというのが恒常化している。ひるがえって考えると松阪を選んでもらうのが非常に大事だということ。そのなかで例えばエンディングサポートなどは、安心して逝けるということで面白い。また以前から、コミュニティセンター化は良い意味でのおせっかいやきをお互いにするということかと思うが、そういう文化の育まれるまちというのは、子育て世代は特に共感を覚えるのではないか。もう少し積極的にアピールしても良いと思う。

委員）
　18 歳の世代は社会を変える力がある。このまちで社会を変えていく力になれるよう、課題はたくさんあるが、むしろそれを強みにできるようなまちづくりができたら良いと思う。みんなで楽しみながらできれば良い。

委員）
　働く場が選べるようになってきたということについて。ある場所から日本中にいる従業員たちをコントロールしながら仕事をしている事例もある。以前も言ったことがあるが、平日が重要になってくる。週末ではなく平日の過ごし方の中でコミュニティがしっかりあるとか、生活に充実感があることが大事。最近日本中をまわっていているが、そういう働き方の人が増えているのではないか。そういう人たちが立ち寄る場所として松阪を毎年選ぶようになってくるだけで変わってくるのかなと思う。そうすると宿泊施設がいるのかもしれない。これから大学のキャンパスも要らないのではないかと思う。重要なのは学生たちの寮が必要ということ。例えば寮を 1000 室くらい作って世界中からその大学に来て、そこでリモートでいろんなことができる環境をつくる。スーツケース１個持って来たら２か月や半年くらい居られるよとしてあげれば良い。三重県と言う場所をフィールドとしながらリモートで自分の大学とやりとりして単位をとるなど活動できる。こういうことが学生でも起こるし、おそらく企業の皆さんでも、特に企画系の人はフィールドを変えて、リアルの場所で企画を練ることができる。そういう時に松阪を選んでもらうためには、医療の問題も学校の問題もそうだろうし、コミュニティがそんなに濃くなくいつもおせっかいをやいてくれて、気楽に住める場所があって、平日もかるく散歩しながらまちを楽しめて飲めるなど。何かそういうコンセプトを、松阪というのはこういうイメージだというものをつくるプロモーションも重要と思う。

委員）
　コロナ禍で、市長も言ってみえる不登校やいじめ等の対策もそうだが。逆にオンラインですることによって学校出てこられない子がようやく授業に参加できるという良い効果もあった。これをずっと継続した場合、特に高校の場合は単位制ですので授業として認知して良いのかという問題があるが。義務教育段階であれば学校の先生の負担がかかるが、例えばその学校の教諭が自校の生徒でだけでなくて、複数の学校の生徒をある教員がサポートするというやり方もある。アメリカでは普段ネット上でやりとりをする大学がある。これだけ進むと、ネット高校もあるが、学校の建物は不要ではないかという話も５年前くらいから出てきている。少し違和感は覚えているが。やはり学習だけでなく社会性や規律性はどうしても“学校”という場でしかできないのではないか、などいろんな意見がある。とはいえ今のＺ世代本当に我々の感覚とは価値観が全く違う。大学生が世界中の学生と交流する場があれば良いと思う。働いている社会人の場合はそこで仕事ができる。小さいお子さんは、松阪市が力を入れている子育て支援のところに預ける。広い世代の方が安心して暮らせる空間があれば松阪にあるとなると非常に魅力的だと思う。

会長）
　県立大学のことがあるが、先ほどからの話でオンラインを使える大学というのも良いのではないか。

市長）

三重県の一番の問題は南北問題。名古屋に近い北勢と人口減少が著しい南勢。松阪は南三重の玄関口だという認識でいる。そういう視点からみると。若い人たちは高校を卒業して 3/4 が進学する。その内 3/4 が県内に残らない。つまり約半分以上が県外へ出ていく。その子たちが就職で帰ってきてくれるとありがたいが、なかなかそういうわけにいかない。人口減少はボディブローのように効いてくる。若者流出を何とかしたいという思いはある。ただ委員が先ほど言われたように学びの形は変わりつつあり、住む場所によって仕事の仕方も流動的になりつつある。そうした社会情勢も見据えながら。よく“足による投票”と言われるが、住みよいまちに引っ越すということは、これから流動的になっていくかと思う。もうひとつ、若者世代で地元から離れたくないと思っている割合は我々の頃より相当増えたと思う。ここはすごく重要で、昔はもっと都会へ出ていきたいという思いは結構みんなあったと思うが、今の若者はそういう思いはあまりないと感じる。どうしてなのかは良くわからないが。皆さんの今のニーズに合うようなものを作っていく必要がある。ただ経済的な話や今の若者の風潮である地元志向を取り入れたものは必要だと思う。

委員）

冒頭で未来という言葉を使われたときに、もし立ち上げるなら新しい大学で学べるものも必要なのかと思う。やはり地方の公立大学で成功しているところはとんでもないことをやっている。私自身が寮での生活をしていたが、今考えると良い体験だったと思う。社会的つながりがこれだけ希薄になっているからこそ、強制的に人間関係を密にさせてしまうというのも良い。松阪市に来たら未来が学べるというのは面白いのではないか。

委員）

寮をつくるというのは意味がある。松阪に居る子がここから東大に通っても良いと思う。高校も同様で、南伊勢高校などは人数が少ないが、その子たちはとにかくその地域に住みたい。出ていった子たちも本当はそのまちに住みたいという思いがある。高校の授業をオンラインでやっても良いのではないか。地元にいる子たちがオンラインでいろんな高校やいろんな大学に行ける仕組みを作るとか。逆に言うと、例えば２学期だけ飯南高校に高校生たちが 100 人くらい過ごすような寮を作っても良いかもしれない。市ができることはそういう寮を整備して学生たちがいつでもここで入れ替われるような場を作ってあげること。ワーケーションのような形で 30 歳くらいまで入れるような寮を作ってあげるのも１つの考え方としては良いのではないか。そこに大学の機能を作っておけば、先生などは別に雇わなくても良い。オンラインでみんな教育する。バーチャルで大学を作ることもできなくはない。時代はだいぶ変わったんだということを見越せば、あまりコストをかけなくてもできることはある。

委員）

三井グループのビジネススクールというのはあるのですか？外国の方はそういうことを学んだりすることに興味がある。

委員）
　そういうのはないですが、節目の研修で真如堂を見せたりなどはある。良い意味での誇りを感じる部分。

委員）
　ミシマサイコの事業については出荷検証とあるが、商品化もするのか？

市長）
　一応１年でできあがるらしいので、4 月に植えて 3 月に刈り取り。場所によっては２年かけて育てている地域もあった。今漢方などは国産に回帰してきている。安心感のこともあり、製薬メーカーがたねから管理をしてきている。たねの供給をうけて育てる。ただ実際に作ってみないとこの地域でちゃんと育つのか分からない。この手のものは地域の人たちに、実際に獣害にあわないか、収穫がどれくらいあるか、取引だどれくらいあるか、について分かっていただくため実証実験を行う。それなりに小遣い稼ぎになるくらいの値段で取引でき、高齢者でもできる作業量であることの２点を満たすものとして考えた。まず 2 反分だが実証実験をすることによって今後増やしていければと思っている。まず成功することが大事で“私もやろう”となってほしい。

委員）
　高齢者や若年層で良く言われる農福連携が目的なのか、産業振興なのか。

市長）
　中山間地域で増えてきている耕作放棄地の対策です。もう一つ、お茶が事業として成り立ちにくくなってきており、傾斜地の茶畑が太陽光パネルに変わって来ている。悪いことではないがあまり斜面がきついと土砂流出の危険がある。それも含めて増える耕作放棄地をなんとか食い止める手立てとして考えた。言われるように実際に中山間地域で農業をしてくれる人は高齢者であり、農福連携の側面もある。

委員）
　四国では家族経営で結構な面積で栽培している。これだけで食べていくことは難しいが、複数重ねれば子育て世代でもできなくはない。ただ面積が必要。耕作放棄地を使えば何人か新しい農家が生活できる可能性はある。ある製薬会社が夕張で大工場を作っている。その製薬会社は日本全国に農地を求めており、産地を守るためにちゃんとした値段で買い取ってくれる。きちんと計画してやっていけば、最初は高齢者だが若い世代の参加も見込まれるのではないかと思う。

会長）

ほかにありますか。

市長）
社会的つながりの SDGｓの話を聞かせていただきたい。

委員）
SDGs は今回のテーマとも近しいことと思う。直近の朝日新聞の調査で 3/4 の方が認知していた。世間の感じは「良いことは分かっているがどう使ってよいか分からない」という方々が多い。しかし、ちょっとチェックシートを配ってお金を支払うと SDGｓ宣言の認定をするといった企業があるなど誤解を招きかねない活動も世の中にはある。誤解されないように、ちゃんと課題解決とか人づくりや自己実現につなげる必要があると認識している。最近パーパス、存在意義や存在価値、という言葉が良く言われる。なぜそれをするのか、なぜ住むのかやなぜはたらくのかということに全て通じる。資料にある地方創生とカーボンニュートラルと子ども福祉の大きな３本柱もそうだが。不安定な時代にどう対応していくかということかと思う。逆に言えば、いかに希望を感じるかをどう伝えていくのかということ。その時に課題解決をする役を担っているという意識をどう育てるかと思っている。話にあった「選ばれるまち」について、選び方が分からないのではないかと思うことがある。ある市でボランティアアドバイザーをしていた時、高校生にボランティアをしましょうと言うと、楽しそうか楽かという間違った選び方をしてしまう。選び方が分かっていない。選び方を教える人がいない。そもそもボランティアではどういう成果が得られるか、選び方を伝えると、自分を見つめる瞬間が生まれて、自分の役に立つことで体験したいとなる。逆にボランティアを受け入れる側にも、労働力としてとらえるのではなく、「あなた方は若者を成長させる機会を提供する人たちです。そこを考えてアピールをして欲しい」と言う。そうすると良い経験が積める。SDGs の視点を用いると理解が早くて、それを現地で体験させることができる。成功体験があれば“このまちが好き”となる。そうすると翌年も行きたいという気持ちになる。このような選び方を経験してもらうことが学生に限らず住むことも働くこともあるのではないか、SDGs の切り口なら入りやすいのではないかと思う。

会長）
たくさんの事業があるが財政面の裏付けはあるのか。

市長）
市の単独費のものもあるが、今後コロナの臨時交付金を利用する事業やまだ補助金が採択されていないのもある。

会長）
今回が任期の節目となります。ありがとうございました。

市長）

　ありがとうございました。今期を振り返ると、子育て相談窓口の設置、ＮＰＯとの語る会、社会的つながり事業など市政推進会議の議論から実現しているもの非常に多くあった。皆様方にいろんなお知恵を拝借しながら進めてまいりました。今後もこの会議を続けていきたいと考えており、皆さま方には引き続き残っていただければと考えております。よろしくお願いたします。

≪午後 5 時 00 分終了≫